

氏 名	大 串 不 二 雄 おお ぐし ぶ じ お
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	論 工 博 第 589 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 48 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	小・中学校の建築計画に関する研究

	(主 査)			
論文調査委員	教授 西山卯三	教授 巽 和夫	教授 増田友也	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は学校建築が学校における教育活動の空間的に具象化されたものであるとし、学校教育の諸要素——学校教育の組織、教育計画の運営、学習指導法等と関連づけながら、学校建築の計画の諸問題を論究するという方法によって、小・中学校の建築計画論を展開したもので、序説及び9章よりなる。

まず序説において、学校建築の計画の問題を論ずるにあっては、学校建築が発達して来た歴史的過程を跡付けることによって、そこから追求さるべき今日の課題が導きだされるとして、その史的展望をおこなっている。戦前における教育の国家による強い統制、戦後には保守的体制への逆行の過程が進み、教育の民主化がさまたげられてきたが、それがまた同時に日本の学校建築の停滞と不可分の関係にあることを述べている。

1章では、学校教育の目的を達成するために作られた学校教育の組織を、施設という側面からとらえた場合、まずそれは教室の組織構成としてとらえられるとして、現在世界でおこなわれている諸種の教室組織の特質と、それらがいかなる歴史的な発達過程の中から発生したものであるかを考察し、教育の思想や理念の発達と学校教育、ひいては教室組織の変遷発展との相関関係をあとづけ、わが国の小・中学校が大正・昭和期以来今日まで一貫して踏襲している「クラスルーム・特別教室システム」の意義を明らかにしている。

2章および3章は、小学校の建築計画の基幹となるクラスルームの計画についてとりあっているが、2章ではその前提となるクラスルームにおける教育指導の特性について考察し、3章ではわが国の小学校の学級における学習活動の近代化の遅れを、授業形態においてはいっせい授業への偏向としてとらえ、それが依然として定型教室を温存させる要因とみ、またわが国における授業形態の改善は、いっせい指導と分団指導の適切な配合にあるとして、それに適応する学習空間の形態を考察している。ついで、クラスルームの空間構成要素の分析から、学習空間と生活空間の合理的な構成方法を論じ、わが国の小学校における望ましいクラスルーム計画の提案をおこなっている。

4章では、教室の配置計画の問題をとりあつかっているが、まず従来クラスルームの配置は、学年別グルーピングが原則とされてきたが、学年別グルーピングの必要性の度合が教室組織によって相違することを知るために実態調査をおこない、伝統的なシステムのもとではルーズなグルーピングが、また協力授業組織のもとでは緊密なグルーピングが必要となることを明らかにし、ついで協力授業組織の典型であるチーム・ティーチング・システムについて、わが国の実施校について実情調査をおこない、わが国におけるチーム・ティーチング運営の特殊性を明らかにするとともに、それに適応する教室の構成や配置計画について考察している。チーム・ティーチングはわが国の小学校において、学習指導システムの近代化の方策として最近全国各地で試みられはじめているものであるが、わが国では法令の規制等によって学年別学級編制のもとに運営されている。著者はそのもとにおけるチーム・ティーチングによる学習集団のフレキシブルな運営に適応する教室のプランニングを論じているが、学年別グルーピングとしてのクラスタータイプや、クラスターの中の共同学習スペース、特別教室の多目的化などの提案を行なっている。

5章では、中学校における教科教室システムの建築計画についてとりあつかっている。教科教室システムは学習指導システムの近代化の方策として導入されつつあるものであるが、その運営は伝統的な「クラスルーム・特別教室システム」におけるように画一的ではなく、教育経営の方針によってさまざまである。それに応じて教室のレイアウトにも種々のタイプがうみだされるが、それらのタイプを実態調査から整理、分類し、それらをうみだす教育指導上の要因は、学習指導と生活指導の相関関係によってきまることが明らかにし、教科教室システムによる建築計画の基本問題を考究している。またこのシステムにおけるプランニングでは、動線処理が特に重要な課題となるが、その合理的な解決は、教室の空間的なレイアウトと、その時間的な利用計画とのタイアップが不可欠であることを考察している。

6章では、非片廊下型プランの典型としてのバッテリータイプをとりあつかい、また7章ではチーム・ティーチングの典型としてのアメリカのチーム・ティーチング・スクールについて考察している。6章ではバッテリー・タイプのプランニングが陥りやすい方法論の誤謬を指摘し、その本質を解明しながらバッテリータイプを自足型教室計画の典型としてとらえている。7章では、4章においてわが国の小学校におけるチーム・ティーチングシステムの建築計画について考察しているので、それと対比して、チーム・ティーチングが創始されたアメリカにおけるチーム・ティーチング・スクールの建築の実情とその発展の過程を考察し、学校建築の画期的な変貌はティーチング・プログラムの改革によってもたらされることをみようとしている。

8章では、小学校における学習以外の生活施設についてとりあつかっているが、「はきかえ」によって屋内と屋外との日常生活における断絶が生じやすく、その対策として「上ばきゾーン」を提案し、また高低分離は、本質的には低年齢児と高年齢児の遊びの場と生活手段使用の場の分離を意味するものであることを論じている。

本論文では、折にふれわが国の教育諸事情の特殊性に基づく学校建築の遅れということにふれているが、その実態については本論文の附章に、1965～66年に著書が共同研究で調査をおこなった結果のまとめがしめされているが、最後の9章において、1971年の22府県にわたる実施計画の最新の資料によって、小学校建築のプランやクラスルームの形態の分析をおこない、それによって現在においても学校建築のプランニ

ングが依然としてコンベンショナルなパターンに停滞し、クラスルームは依然として戦前の定型教室が支配力をもっていることを実証している。

論文審査の結果の要旨

小・中学校の建築といえば、全国津々浦々ほとんど同型のものであり、完成された様式であるかの如くうけとられやすいが、未来を拓く次代の国民が教育されている場としていかなるものであるべきか、教育のあり方とともにその建築計画のあり方もまたきびしく問われている。

小・中学校の建築計画の研究は、戦後かなりの進展をしめしているが、学校教育特に教育計画の運営や教育指導との関連において学校建築の計画を研究したものはまだない。また近年、学校教育の改革が大きな課題として意識されはじめ、新しい教育指導のシステムが導入されはじめているが、これに対応する学校建築の計画の領域はまだ未開拓である。著者は、学校建築計画の新しい進展をうながすためきわめて重要と思われるこれらの問題をとりあつかっている。

著者は学校建築の計画の研究を、現実の学校教育の諸条件によって規定される学校教育の諸活動に対する建築空間の適応の方法を研究するものであるとし、学習活動の基礎をなす学校教育の諸要素——学校教育の組織、教育計画の運営、学習指導法と建築計画との関連などをあつづけながら、その諸問題を考究している。このような学校教育と学校建築との相互関連性に即して建築計画の問題を明らかにしていくという方法は、これまでの研究がたち入ることをしなかったものであり、それが本論文のユニークな特徴をなしている。

著者はまず学校建築の計画を規制する学校組織の基幹的要素が教室組織にあるとして、1章において、教育の理念や教育論の歴史的発達過程で教室組織がどのように移りかわってきたかをあつづけることによって、わが国の小・中学校が大正・昭和期から現在にいたるまで一貫して維持しつづけてきた「クラス・ルーム特別教室システム」の歴史的意義を明らかにしている。ついで欧米諸国における教育指導が、教育理念の民主的な発達やカリキュラム改造運動などを通じて発達してきた過程をあつづけることによって、欧米諸国のクラスルームづくりにおいて児童を主体とする基本概念が確立されていたことを明らかにするとともに、3章における小学校のクラスルーム計画の研究において、そのような発達を経ることのなかったわが国の教育指導が、注入主義的いっせい指導を基本としておこなわれてきたことから、今日においても定型教室を主流とするクラスルーム作りが依然としておこなわれている実情をあきらかにし、クラスルームの空間計画における今日の問題点と今後の発展方向を論じている。また著者は、わが国の小学校のクラスルームにおける学習活動が、欧米におけるように多機能化していないことから、クラスルーム計画は欧米を模倣することによって得られるものではなく、学習指導の近代化の方向はいっせい指導と分団指導の適切な配合にあるとし、クラスルームの計画はこれに適応すべきものであるとして、そのサイズ・形態・空間構成要素の配置等を考究している。これによってわが国の教育指導の特殊性にもとづくクラスルームの改善の方策が明らかにされたといえる。

4章は教室の配置計画をとりあつかっているが、これまでクラスルームの配置計画は学年別グループイングが原則とされてきたのに対して、わが国の小・中学校の学校組織の普遍的な形態が学級主導型であって、

そのもとでは学年別グルーピングは第一義的な要件とはなりえず、それは新しい教室組織としてのチーム・ティーチング・システムにおいてかえって決定的要件となることを明らかにしている。さらに、近年小学校教育における授業組織の刷新がさげばれ、チーム・ティーチングを導入する学校が全国的にあらわれはじめているが、従来まだ手をつけられていないこのシステムにおける建築のプランニングの問題をとりあげている。これはアメリカにおいて創始されたものであるが、学校教育の組織、カリキュラムやその運営がいちじるしくことなるアメリカの例はそのままが国の参考とはなりえない。著者はチーム・ティーチング運営のわが国における特殊性をふまえて、そこからでてくる建築計画の諸問題を明らかにした点、今後の学校計画に寄与するところが大きい。

また5章では中学校の新しい教室組織として教科教室システムをとりあつかっている。中学校教育においても学習指導法の刷新が問題となりつつある現在、その方策としてこのシステムが導入されはじめているが、教科教室型の校舎は1950年代に一時つくられたことがあるものの、定着しなかった。それは中学校教育の側から新しいシステムへの要求が熟していなかったこともあるが、建築計画が教育計画に適切に対応しえなかったことにもよると思われる。教科教室システムによる教育指導の運営は「クラスルーム・特別教室システム」におけるように単純ではない。そこでは教育指導の方針によって教育計画の運営に種々のパターンが生ずるが、著者はこのシステムで教育をおこなっている学校の実態からパターンを整理し、これに適応する建築計画のタイプを明らかにし、各タイプの利害得失を論じ、このシステムによる建築計画上の問題をはじめて系統的に明らかにしている。

そのほか、以上の論考の補説と考えられる調査や、学習以外の生活施設などについても注目すべき知見を提出している。

これを要するに、本論文は冒頭にものべたように、教育計画の運営や教育指導法との相互関連の追求を通して学校建築の計画のあり方を究明したものであり、その方法論に新しい視野をあたえたものであり、また現在問題となりつつある新しい教育のシステムとしてのチーム・ティーチング・システムや教科教室システムによる学校建築の計画をはじめてとりあげ、問題点を解明してその計画に対する指針を与えたものであって、学術上・實際上寄与するところが大きい。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。